

関係機関長殿
病虫害防除員殿
調査員・情報員殿
農業資材販売等関係者殿

奈良県病虫害防除所長

平成29年度病虫害発生予報 第4号（8月予報）の送付について

このことについて、下記の通り発表しましたので送付します。安全・適正な防除についてご指導をお願いします。

今月の発生に注意を要する病虫害

作物名	病虫害名	発生時期	発生量
水稻	紋枯病	平年並	やや多い
大豆	カメムシ類	平年並	やや多い
カキ	カキノヘタムシガ	やや早い	平年並
チャ	チャノミドリヒメヨコバイ	平年並	やや多い
	チャトゲコナジラミ	平年並	やや多い
ナス	カスミカメムシ類	平年並	やや多い
ネギ	ネギアザミウマ	平年並	やや多い
野菜・花き類	ハダニ類	平年並	多い
ナス・キュウリ	ミナミキイロアザミウマ	やや早い	やや多い
トマト・キク	ミカンキイロアザミウマ・ ヒラズハナアザミウマ	平年並	やや多い
ナス・トマト・キク	オオタバコガ	平年並	やや多い
野菜類・キク	シロイチモジヨトウ	平年並	やや多い
アブラナ科野菜	ハイマダラノメイガ	平年並	やや多い

近畿地方の向こう1ヶ月（7/29－8/28）の気象予報では、天候は平年と同様に晴れの日が多い見込みです。気温は高い確率が50%、降水量は平年並または少ない確率ともに40%、日照時間は平年並の確率が40%です。

6月1日～9月30日は農業危害防止運動の重点実施期間です。農薬のラベル記載事項の遵守と使用履歴の記帳、農薬の飛散防止、適正な保管管理等を徹底しましょう。

農薬のラベルに記載された適用作物名について、思い込みや読み違いによる誤使用が起こる可能性があります。以下のような作物間ではいずれも農薬登録内容が異なりますので、特に注意して下さい。

○トマトとミニトマト

○ピーマンとシシトウ

○実えんどう（未成熟な種子を収穫するもの）とさやえんどう（未成熟なさや付き豆を収穫するもの）とえんどうまめ（成熟した種子を収穫するもの）

○さやいんげん（未成熟なさや付き豆を収穫するもの）といんげんまめ（成熟した種子を収穫するもの）

その他、判断に迷った場合には、各農林振興事務所または病虫害防除所へお尋ねください。

I. 普通作物

1. 水稻

(1) いもち病（穂いもち）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月下旬の巡回調査では、葉いもちの発生ほ場率は平坦地域で1.9%、中山間地域で10%でした。
- 2) 山あいのほ場や葉いもちが多発しているほ場では、穂いもちの発生が懸念されます。
- 3) 今後、出穂期の天候不順によって、穂いもちの発生が助長される可能性があります。

防除上の注意事項

- 1) 中山間地域の常発地域では、下葉に葉いもちが発生している場合や周囲に多発ほ場がある場合は、出穂期の降雨によって穂いもちが発生しますので、必ず出穂期の防除を行います。
- 2) 水和剤、粉剤等による穂いもちの防除適期は、出穂始めです。中山間地域の葉いもちの多発ほ場では、出穂期の天候が悪ければ、穂ぞろい期（8割程度出穂した時期）に2回目の防除を行います。
- 3) 周辺の農作物等への農薬の飛散の影響が考えられる場合には、飛散の少ない粒剤を使用します。粒剤を使用する場合は、薬剤によって出穂前の使用時期が異なるので、遅れないように散布します。また、粒剤の施用後1週間は止水管理を行います。
- 4) 出穂後に穂いもちが多発した場合には、収穫前使用時期に注意し、傾穂期までに早めに追加防除を行います。
- 5) 本県においてQoI剤耐性菌が発生しています。本系統薬剤の効果が著しく低い場合には、各農林振興事務所または病虫害防除所にご相談ください。

(2) 紋枯病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 7月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は平坦地域では9.1%、中山間地域では15%でした。昨年一部地域で多発圃場が確認され、菌密度が高くなっている恐れがあります。
- 2) 今後、定期的な降雨と高温によって、上位葉へ病斑が進展する可能性があります。

防除上の注意事項

- 1) 平坦地域での防除適期は中干し期の7月下旬～8月上旬です。発生ほ場では遅れないように防除を行います。また、中山間地域の発生ほ場では、8月中旬頃までに中位葉鞘への病斑の進展が認められれば、収穫前使用時期に注意して直ちに防除を行います。
- 2) 水和剤や粉剤で防除する場合には、株元に薬剤がよくかかるよう、落水してから防除します。

(3) ばか苗病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月下旬の巡回調査では発生が認められませんでした。中山間地域の一部で多発ほ場が見られます。

防除上の注意事項

- 1) ほ場内をよく観察し、発病が認められた場合にはすみやかに株ごと抜き取り、焼却するか地中へ埋設して処分します。特に採種ほ周辺では、発病株の抜き取りを徹底します。
- 2) 発生ほ場では自家採種を控え、種子更新を行います。また、次年度の種子消毒を徹底します。

(4) ニカメイガ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 7月下旬の巡回調査では、発生は認められませんでした。

2) 農業研究開発センター（桜井市池之内）のフェロモントラップへの誘殺は見られません。

3) 防除上の注意事項

- 1) 第1世代幼虫の発生がみられるほ場では、直ちに基幹防除を行います。
- 2) 第1世代の発蛾盛期は、8月15～20日と予想されます。
- 3) 第1世代幼虫が多発した場合、発蛾盛期後にも防除を行います。なお、粒剤で防除する場合には1週間程度早めに散布します。

(5) セジロウンカ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：少ない

予報の根拠

- 1) 農業研究開発センター（桜井市池之内）の予察灯への飛来数は平年より少ない状況です。
- 2) 7月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は平坦地域で22%、中山間地域で7.1%と平年に比べ少なくなっています。

防除上の注意事項

- 1) ほ場での発生がないか注意して観察します。
- 2) 株当たり平均10頭以上の発生で被害が発生します。
- 3) 7月下旬～8月上旬にニカメイガ、イネツトムシ、ウンカ類の基幹防除を必ず行います。

(6) トビイロウンカ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月下旬の巡回調査では、発生は認められませんでした。農業研究開発センター（桜井市池之内）の予察灯への飛来も認められていません。

防除上の注意事項

- 1) 8月中旬までに、株当たり1頭以上発生しているほ場では防除します。

(7) 斑点米カメムシ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は平坦地域では17%、中山間地域では31%でした。

防除上の注意事項

- 1) 出穂前に除草できなかったほ場では、出穂10日後の乳熟期に殺虫剤による防除を必ず行います。
- 2) 中山間地域の早生品種など例年被害の多いほ場では、出穂7日後と14日後の2回防除を行います。
- 3) 水田の周縁部に被害の多い傾向があるので、発生が少ない場合には額縁防除でも有効です。

(8) イチモンジセセリ（イネツトムシ）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 7月下旬の巡回調査では発生は認められませんでした。

防除上の注意事項

- 1) コブノメイガとの同時防除が可能で、防除適期は8月第1～2半旬です。

(9) コブノメイガ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：少ない

予報の根拠

- 1) 7月下旬の巡回調査では、発生は認められていません。
- 2) 農業研究開発センター（桜井市池之内）のフェロモントラップでは飛来は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) 7月下旬～8月上旬のニカメイガ、イネツトムシ、ウンカ類の基幹防除を必ず行います。

2. 大豆

(1)ハスモンヨトウ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 気象予報では、8月は晴れの日が少ないと予想されています。
- 2) 農業研究開発センター（桜井市池之内）のフェロモントラップの誘殺数は低く推移しています。

防除上の注意事項

- 1) 食害跡の白葉が見られたら、早期に防除を行います。
- 2) 老熟幼虫では薬剤の殺虫効果が落ちるので、若齢幼虫の時に防除を行います。

(2)カメムシ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 農業研究開発センター（桜井市池之内）の予察灯に7月以降、ホソヘリカメムシ、アオクサカメムシ、イチモンジカメムシの連続的な飛来が見られます。
- 2) 露地ナスの果実に飛来するアオクサカメムシ、ブチヒゲカメムシがやや多い傾向にあります。

防除上の注意事項

- 1) 8月中旬の基幹防除を行います。

II. 果樹・チャ

1. カンキツ

(1)ミカンハダニ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月下旬の巡回調査では、平均寄生葉率は10.1%でした。

防除上の注意事項

- 1) 高温・乾燥が続くとハダニの増殖に適した条件となるので、発生状況を観察し密度が低いうちに適切な防除を行います。

2. ナシ

(1)黒斑病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月下旬の巡回調査では、発病葉率は4.6%でした。

防除上の注意事項

- 1) 収穫期まで降雨による感染が続きますので、発生状況に応じて防除します。
- 2) 徒長枝葉への感染拡大が目立っています。棚上の徒長枝先端葉まで薬液が到達するように、十分量を散布します。また、散布前には混み合った枝の整理をしておきます。

(2)ハダニ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月下旬の調査では、寄生葉率は1.0%で、多発園はみられませんでした。

防除上の注意事項

- 1) 薬剤散布は丁寧に言い、散布むらのないようにします。
- 2) 不要な徒長枝を置かない、重なり枝を作らない等、栽培管理面でも薬液がかかりやすいような工夫を心がけます。
- 3) ハダニの増殖に適した時期ですので、発生状況には十分注意します。

3. カキ

(1) 炭そ病

予報内容 発生時期：平年並 発生量 平年並

予報の根拠

- 1) 7月下旬の巡回調査では、甘柿園（富有）における炭そ病の発病果率は0.1%で、発病枝（病斑の見られる新梢）は認められませんでした。

防除上の注意事項

- 1) 8月の高温期には病勢は停滞しますが、低温・降雨が続く場合や台風通過後には、治療効果を有する殺菌剤で速やかに防除を実施します。
- 2) ほ場をよく観察し、発病枝や発病果をできる限り除去し、秋期の感染源を減らしておくことが特に重要です。発病枝・果実はほ場内に放置せず、必ず園外に持ち出して処分します。

(2) うどんこ病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月下旬の巡回調査では、発病葉率は5.1%と、平年並みの発生となっています。

防除上の注意事項

- 1) 発生の多い園では8月上中旬の基幹防除時にうどんこ病登録薬剤を用い、秋季の蔓延防止に努めます。

(3) フジコナカイガラムシ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月下旬の巡回調査では、寄生果率は2.3%でした。

防除上の注意事項

- 1) 薬剤散布前には徒長枝や重なり枝を整理し、薬液がかかりやすい状態にしておきます。
- 2) ヘタ裏側に、十分量の薬液を散布むらがないよう丁寧に散布します。特に甘柿はヘタと果実の隙間が狭く、カイガラムシに薬液が届きにくくなっています。多発園では散布7～10日後頃に再散布を行うと効果が高まります。
- 3) 成幼虫が混在するケースが多いので、スミチオン水和剤40等の有機リン剤の効果は低くなります。多発園では防除薬剤はモスピラン顆粒水溶剤を用います。

(4) カキノヘタムシガ

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 御所市のフェロモントラップ調査では、成虫の発生開始期は7月18日で平年よりやや早くなっています。

防除上の注意事項

- 1) 防除時期の目安として、誘殺開始の15日後頃ですので、8月2日頃と思われます。
- 2) 前年多発園および6月の果実被害が多かった園では、通常のヘタムシ防除の7日後に追加防除を行うと防除効果が高まります。

4. 果樹共通

(1) カメムシ類（チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシ・クサギカメムシ）

予報内容 発生時期：やや遅い 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 水銀予察灯によるチャバネアオカメムシの誘殺数は、全ての調査地点でやや少ない状態が続いています。
- 2) 7月下旬の巡回調査では、ヒノキ樹へのカメムシの寄生数は平均0.5頭とやや少なく、寄生樹率も28%とやや低くなっています。

防除上の注意事項

- 1) 飛来がない園での予防散布は、天敵類の減少によってカイガラムシ類、ハダニ類の増加につながるなど弊害が大きいため控えます。

- 2) 8月中は特別なカメムシ防除は一部の常発園を除き必要ないと思われます。ただし、9月以降の発生動向については、今後のカメムシ情報に注意してください。

5. チャ

(1)炭そ病・もち病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 二番茶摘採後に伸長した葉での炭そ病、もち病の発生は平年並でした。

防除上の注意事項

- 1) 開葉期が防除適期です。
2) 二番茶摘採残葉での発生が多く降雨が続く場合、開葉期に銅水和剤など予防剤で防除します。その後発生が認められる場合、治療効果のある剤で防除を行います。

(2)チャノコカクモンハマキ・チャハマキ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや少ない(チャノコカクモンハマキ)
平年並 (チャハマキ)

予報の根拠

- 1) 大和茶研究センター(奈良市矢田原町)のフェロモントラップにおける7月第5半旬までの誘殺状況は、チャノコカクモンハマキの発生量はやや少なく、チャハマキの発生量は平年並でした。発蛾最盛期は8月中旬頃の見込みです。

防除上の注意事項

- 1) 発蛾最盛期の7～10日後が防除適期です。

(3)チャノホソガ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 大和茶研究センター(奈良市矢田原町)のフェロモントラップにおける7月第5半旬までの誘殺状況は、発生量、発生時期とも平年並でした。

防除上の注意事項

- 1) 秋芽が連続して生育する更新園、幼木園では加害されやすいため、防除が必要です。

(4)チャノミドリヒメヨコバイ・チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い(チャノミドリヒメヨコバイ)
平年並 (チャノキイロアザミウマ)

予報の根拠

- 1) 7月の発生量はチャノミドリヒメヨコバイはやや多く、チャノキイロアザミウマは平年並でした。

防除上の注意事項

- 1) 秋芽の生育に多大な影響を及ぼすため、開葉期の防除を徹底します。

(5)カンザワハダニ

予報内容 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月下旬のは場での発生量は、平年並でした。

防除上の注意事項

- 1) 発生が認められる場合は、早期に薬剤散布を行います。
2) 薬剤の感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避けます。

(6)クワシロカイガラムシ

予報内容 幼虫ふ化期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月下旬の調査結果では、発生時期、量ともに平年並でした。

防除上の注意事項

- 1) 防除適期は8月上中旬頃と見込まれますが、地域によって適期は異なります。

- 2) 寄生枝を瓶挿しするか、株の中に 10cm 四方の粘着トラップを茶株面から 10cm 下に垂直に設置して幼虫の孵化を確認し、防除適期を把握します。
- 3) 薬剤は夏期のふ化が長期にわたるため、ふ化の状況によって 2 回散布が必要です。

(7) チャトゲコナジラミ

予報内容 **発生時期： 平年並** **発生量： やや多**

予報の根拠

- 1) 大和茶研究センター（奈良市矢田原町）での発生状況は、発生量はやや多く、発生時期は平年並です。

防除上の注意事項

- 1) 防除適期は若齢幼虫期（成虫発生が収束した頃）の 8 月上中旬頃と見込まれますが、地域によって適期は異なります。
- 2) 薬剤は茶株すそ部を中心に葉裏に良くかかるように散布します。

Ⅲ. 野菜類・花き類

1. イチゴ（育苗）

(1) 萎黄病

予報内容 **発生時期： 平年並** **発生量： 平年並**

予報の根拠

- 1) 7 月下旬の巡回調査では、発生は認められませんでした。
- 2) 今後、高温により発病が助長されると予想されます。

防除上の注意事項

- 1) 発病株は、周囲の培土（土壌）およびランナーも含めて早期に持ち出し、肥料袋等に入れて密閉して処分します。
- 2) 苗床は、浸水や冠水しないように管理します。オガクズ栽培では底部に水が溜りやすいので、特に排水対策を徹底します。
- 3) 本ぼの太陽熱による土壌消毒の処理期間は、通常 7 月中旬～8 月上旬の 20 日間以上を目安にします。処理中には、被覆ビニールの破れ等を必ず点検します。なお、処理途中で追加注水は地温を下げるので、処理前に十分注水しておきます。
- 4) 本ぼの土壌消毒後は、汚染土壌の付着や移動によって病原菌を持ち込まないように、農作業や浸冠水に注意します。

(2) 炭そ病

予報内容 **発生時期： 平年並** **発生量： 平年並**

予報の根拠

- 1) 7 月下旬の巡回調査では、発生は認められませんでした。
- 2) 8 月以降にランナーや子苗が混み合ってくると高温多湿となり、急激に被害が拡大する恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 発生前からアントラコール顆粒水和剤、ジマンダイセン水和剤による定期的な予防散布を行います。上記の定期的な予防散布に加えて、強い風雨等の後や葉かき、ランナーカットの作業後にはバルクート水和剤、セイビアーフロアブル 20 等を散布します。
- 2) アミスター 20 フロアブル、ベンレート水和剤は、耐性菌が確認されているため、炭そ病防除には使用を控えます。
- 3) 発病株を発見した場合は、発生部の周囲をシートや古ビニールで被覆した後、直ちにゲッター水和剤を散布します。
- 4) 夜温が 25℃以上となる高温・多湿時に多発しやすくなります。アスカルビー、古都華、章姫、さがほのか等の罹病性の品種では、苗床が混み合っただけで蒸れないように、必ず株の整理を行います。
- 5) 多かん水や排水不良による過湿は、本病の発生に好適な条件となるので注意します。点滴かん水による雨除け育苗は、本病の防除に非常に有効です。

(3) うどんこ病

予報内容 **発生時期： 平年並** **発生量： 平年並**

予報の根拠

- 1) 7月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 27%、発病小葉率 1.7%でした。
- 2) 高温時は一時的に病勢が衰え、発生は目立たなくなりますが、8月下旬以降に気温の低下とともに再び病勢が進展し、発生が拡大する恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 雨除けした寒冷紗の被覆下で発病しやすく、また過繁茂になると発病を見逃しやすいので、注意が必要です。
- 2) 発生ほ場では、必要なランナー数が確保できれば、親株は早めに除去し、葉かきを行って伝染源を除去するとともに、薬剤をかかりやすくしてから薬剤防除を行います。
- 3) 薬剤防除は、サンヨールの 1,000 倍等で予防に努め、発生初期にアミスター20フロアブル、ストロビーフロアブル又は、パンチョ TF 顆粒水和剤（トリフミン水和剤と同じ有効成分を含む）及びラリー乳剤等の DMI 剤を用いて、3～4回の体系防除を行います。なお、耐性菌の出現を避けるため同一薬剤の連用は避けます。

2. ナ ス

(1) 褐色腐敗病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月下旬の巡回調査では、発生は認められませんでした。
- 2) 今後、降水量が多くなると発生が拡大する恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 8月下旬以降、台風の接近等で強風を伴う降雨が続くと、発病が助長されます。降雨後に予防散布を励行します。
- 2) 被害枝葉及び果実は伝染源となるので、必ず早期には場外へ持ち出して処分します。
- 3) 病原菌は水によって伝染するため、ほ場及び畝上の排水を良くし、敷きワラやマルチによって降雨による「はね上がり」伝染を回避します。

(2) うどんこ病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月下旬の巡回調査では発生が認められませんでした。

防除上の注意事項

- 1) 多発ほ場では整枝剪定を行い通風を良くし、多肥栽培を避け適切な肥培管理による樹勢維持に努めます。
- 2) 病気蔓延後の薬剤防除では効果が劣りますので、予防および発生初期の薬剤防除を徹底します。

(3) カスミカメムシ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 2) 7月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 78%でした。

防除上の注意事項

- 1) 新葉をよく観察し、奇形や丸い小孔が観察されたら直ちに防除します。
- 2) 土着天敵温存に取り組んでいる場合は、コルト顆粒水和剤で防除します。

(4) チャノホコリダニ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月下旬の巡回調査では発生は認められませんでした。

防除上の注意事項

- 1) 生長点付近をよく観察します。発生初期には新芽の伸張が悪く、新葉の葉裏にやや褐色がかかった光沢が観察されます。果実被害が発生してからでは防除効果が劣りますので、発生初期の防除を心がけます。

- 2) 登録のある殺ダニ剤はいずれも殺虫効果が高いですが、土着天敵温存に取り組んでいる場合は、スターマイトフロアブルまたはアプロードエースフロアブルで防除します。

3. ネギ

(1) ネギハモグリバエ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月下旬の巡回調査では、発生圃場率 100%、寄生葉率 34%でした。

防除上の注意事項

- 1) アルバリン顆粒水溶剤の生育期株元灌注処理の効果が比較的高いので、発生初期に処理します。処理薬量が少ないと効果が低いので、ラベルに書かれた濃度、薬量をよく確認して処理します。また定植ネギの場合は、定植前日～定植時に育苗トレイに灌注処理を行います。
- 2) アルバリン顆粒水溶剤の生育期株元灌注処理の残効は2～4週間程度ですので、処理後も発生によく注意して、再発生が見られた場合はリーフガード顆粒水和剤などを散布します。散布の際、ネギは薬液をはじきやすいので、スカッシュ、まくぴかなどの展着剤を加用します。
- 3) ハモグリバエが多発した残さは次の発生源になりますので、できるだけほ場の外に持ち出して処分します。また、多発ほ場の株元土中にはハモグリバエの蛹が高密度で残存しますので、収穫後に簡易太陽熱消毒を行うか、次作の前にバスアミド微粒剤などを処理します。

(2) ネギアザミウマ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 67%、被害株率 44%でした。

防除上の注意事項

- 1) アルバリン顆粒水溶剤の生育期株元灌注処理でネギハモグリバエと同時に防除します。また定植ネギの場合は、定植前日～定植時に育苗トレイに灌注処理を行います。
- 2) アルバリン顆粒水溶剤の生育期株元灌注処理の残効は4週間程度ですので、再発生が見られた場合は登録のある薬剤を定期的に散布します。散布の際、ネギは薬液をはじきやすいので、スカッシュ、まくぴかなどの展着剤を加用します。
- 1) 他府県では一部の殺虫剤に対する感受性の低下が報告されています。薬剤の効果に疑問がある場合は各農林振興事務所または病害虫防除所へご相談ください。

4. キク

(1) 白さび病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月下旬の巡回調査では、発生が認められませんでした。
- 2) 高温により病勢は停滞しますが、秋雨とともに発生が拡大する恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 下葉の発病葉は伝染源となるので、発生ほ場では早期に摘葉し、ほ場に放置せず土に埋める等処分します。収穫後、必要のない株は放置せず、早期に処分します。
- 2) 今後、夜温が25℃以下に低下し、降雨が続く場合には、降雨後に上位葉を中心にアミスター20フロアブル、ストロビーフロアブルおよびアンビルフロアブル、ラリー乳剤などを用いて予防します。また耐性菌の出現を避けるため同一薬剤の連用は避けます。
- 3) 収穫後の次年度親株は、早期に下葉を摘葉・処分します。その後、秋雨期にはジマンダイセンフロアブルやサンヨール等で予防散布を行います。

5. 野菜類・花き類共通

(1) アブラムシ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月下旬の巡回調査で発生ほ場率は、イチゴ育苗 36%、トマト 25%、スイカ 33%でした。ナス、キュウリ、ホウレンソウ、ネギ、キクでは発生は認められませんでした。

防除上の注意事項

- 1) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一系統薬剤の連用は避けます。
- 2) 大分・宮崎県、和歌山県、愛媛県において、ネオニコチノイド系薬剤に対する感受性が低下したワタアブラムシが報告されています。今後、分布の拡大が予想されますので、本系統薬剤の効果が低い時は各農林振興事務所または病害虫防除所へご相談下さい。
- 3) イチゴ本ほのハダニ防除にカブリダニ製剤の使用を予定している場合、育苗ほでの使用薬剤の選択に注意します。有機リン・合成ピレスロイド・ネオニコチノイド系薬剤をはじめ、育苗期、育苗後期からは使用できない薬剤があります。詳しくは、各農林振興事務所へお問い合わせください。

(2)ハダニ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：多 い

予報の根拠

- 1) 7月下旬の巡回調査では、発生ほ場率はイチゴ育苗 82%、ナス 33%、スイカ 100%、キク 60%でした。キュウリでの発生は認められませんでした。
- 2) 気象予報では、今後、気温の高い日が続くと予想されており、密度増加が予想されま

防除上の注意事項

- 1) 雨よけなどハウス栽培では、天候にかかわらず密度増加しやすいので注意します。
- 2) イチゴ、キクのナミハダニでは、ダニサラバフロアブル、スターマイトフロアブル、ダブルフェースフロアブル、カネマイトフロアブルで薬剤感受性の低下した個体群が増えています。薬剤の効果に疑問を感じた場合は各農林振興事務所または病害虫防除所へご相談ください。薬剤感受性の低下を避けるために、同一薬剤の連用は避けます。
- 3) ナス、スイカ、キュウリのカンザワハダニは、葉の黄化を注意して観察します。雨が降らない場合は特に増加が早いため、発生を認め次第、直ちに防除します。
- 4) イチゴ育苗では土着天敵の活動が盛んな時期ですので、有機リン・合成ピレスロイド・ネオニコチノイド系薬剤の使用を控え、天敵に対する影響の少ない気門封鎖剤を使用します。
- 5) イチゴ本ほのハダニ防除にカブリダニ製剤の使用を予定している場合は、薬剤の選択に注意します。育苗期、育苗後期からは使用できない薬剤があります。詳しくは、各農林振興事務所へお問い合わせください。

(3)ミナミキイロアザミウマ（ナス、キュウリ）

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 7月下旬の巡回調査では、被害果の発生ほ場率はナスで 44%でした。キュウリでは発生は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) 隣接ほ場の、栽培終了後に放置されたスイカやキュウリなどが枯れた後に、成虫が飛来してきますので、残さの確実な処分と防除を心がけます。
- 2) 多くの殺虫剤に対する感受性が低下しています。夏秋ナスでは、土着天敵が増加・活動する時期ですので、合成ピレスロイド剤、ネオニコチノイド剤、有機リン剤、カーバメート剤、マクロライド系剤等、天敵に悪影響のある殺虫剤の使用を控えます。ミナミキイロアザミウマが発生した場合には、プレオフロアブル、モベントフロアブルを散布します。

(4)ミカンキイロアザミウマ・ヒラズハナアザミウマ（トマト、キク）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 7月下旬の巡回調査では、トマトの被害果の発生ほ場率は100%、キクでの発生ほ場は100%でした。

防除上の注意事項

- 1) トマトでは花に飛来した成虫の産卵痕が白ぶくれ果となります。白い紙の上で花房を叩き、アザミウマが落下してきた場合は防除します。
- 2) キクでは、一部地域でスピノエース顆粒水和剤に対する感受性の低下を確認しています。抵抗性の発達を防止するため、同一系統薬剤の連用を控えます。

(5) オオタバコガ (ナス、トマト、キク)

予報内容 発生時期： 平年並 発生量： やや多い

予報の根拠

- 1) 7月下旬の巡回調査では、キクの発生ほ場率は80%でした。ナス、トマトでの発生は認められませんでした。一部のほ場で多発を確認しています。
- 2) 第2世代の飛来盛期は8月上旬と予想されますが、多発地では連続的な飛来が予想されます。

防除上の注意事項

- 1) 新葉の裏側や蕾に産卵しますので、よく観察して初期防除に努めます。
- 2) ナスでは、ふ化幼虫の食入により蕾や花が落下しますので、落下した花蕾を割って、幼虫発生や食害の有無を確認します。栄養生長期のキクでは新芽の中を覗き、ふ化幼虫の食入の有無を観察します。
- 3) 果菜類の被害果には幼虫が入っているので、早めに除去して捕殺します。
- 4) 今後、発生が続くと予想されますので、多発地では定期的に防除します。幼虫が大きくなると殺虫剤の効果が低下しますので、ほ場をよく観察して幼虫が小さいうちに防除します。

(6) シロイチモジヨトウ (野菜類、キク)

予報内容 発生時期： 平年並 発生量： やや多い

予報の根拠

- 1) 農業研究開発センター（桜井市池之内）、大和高田市のフェロモントラップへの誘殺数はやや多くなっています。

防除上の注意事項

- 1) 平年の発生は、ネギ、キャベツ等アブラナ科作物にはほぼ限定されていますが、誘殺数がやや多いので、他の野菜類、キク等でも被害に注意します。
- 2) 近年、殺虫剤感受性の低下は報告されておらず、防除薬剤の選択に特段の注意は必要ないと考えられますが、明らかな防除効果不足が見られた場合は、病害虫防除所または各農林振興事務所にご相談ください。

(7) ハスモンヨトウ

予報内容 発生時期： 平年並 発生量： やや少ない

予報の根拠

- 1) 農業研究開発センター（桜井市池之内）のフェロモントラップの誘殺数は低く推移しています。

防除上の注意事項

- 1) ふ化幼虫の加害による白変葉や、葉裏の卵塊、幼虫を確認したら、直ちに防除します。

(8) ハイマダラノメイガ (アブラナ科野菜類)

予報内容 発生時期： 平年並 発生量： やや多い

予報の根拠

- 1) 気象予報では8月の気温が高いので、降水量は平年並または少ないと予想されていますので、発生に好適な条件となります。

防除上の注意事項

- 1) 作物の成長点付近をよく観察して、発生が見られたら直ちに防除します。
- 2) 育苗期後半または定植時に粒剤またはセルトレイに灌注できる薬剤の処理が有効です。

※農薬に関する情報は、平成 29 年 7 月 26 日までの農薬登録情報に基づいて記載しています。

お問い合わせは

奈良県病害虫防除所
TEL. 0744-47-4481

病害虫防除所ホームページ
<http://www.jppn.ne.jp/nara/>